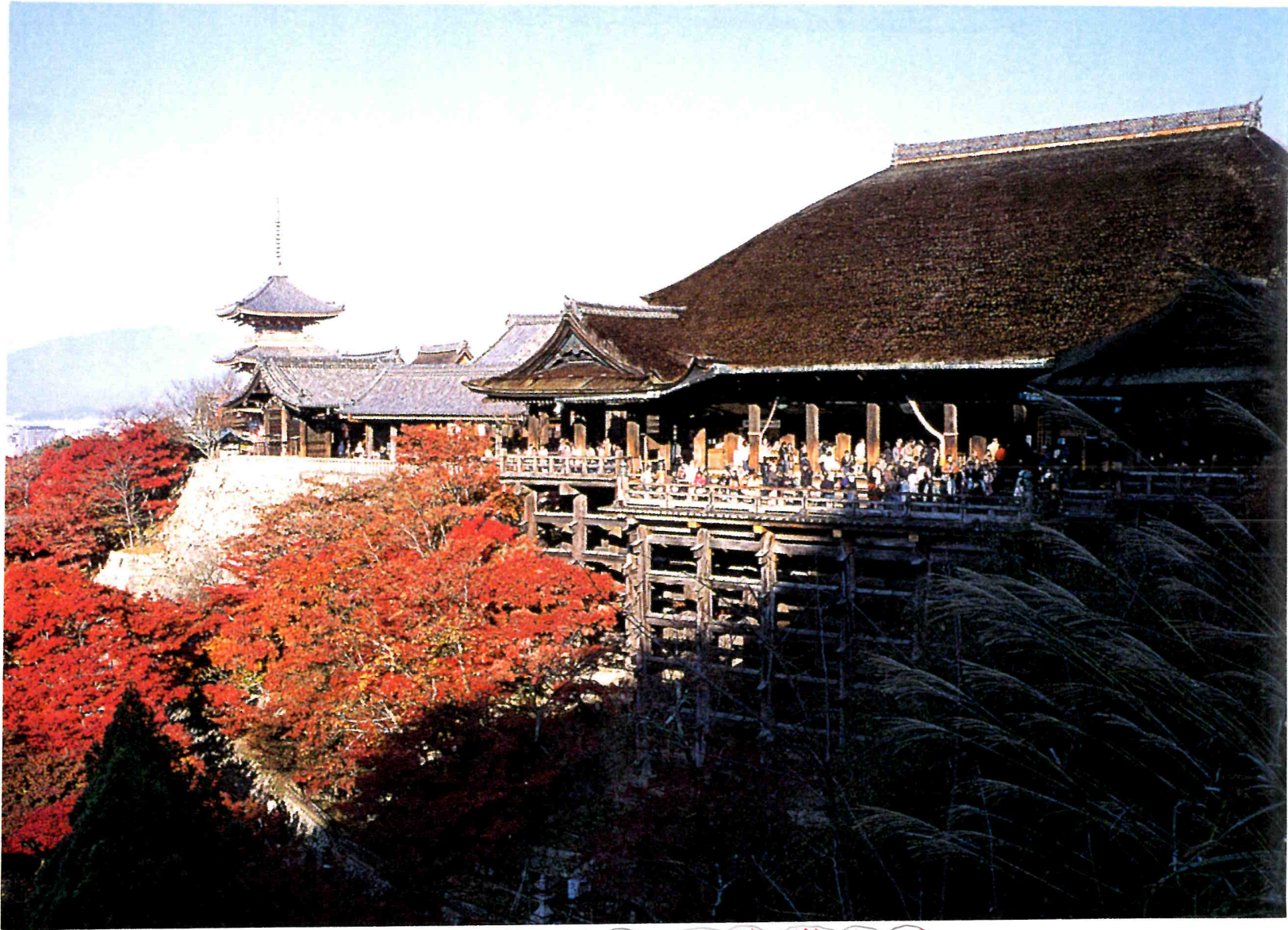


5,625 P

・カラー  
・左頁の  
上半分に、  
大きくはみ出  
しに掲載下  
さい。

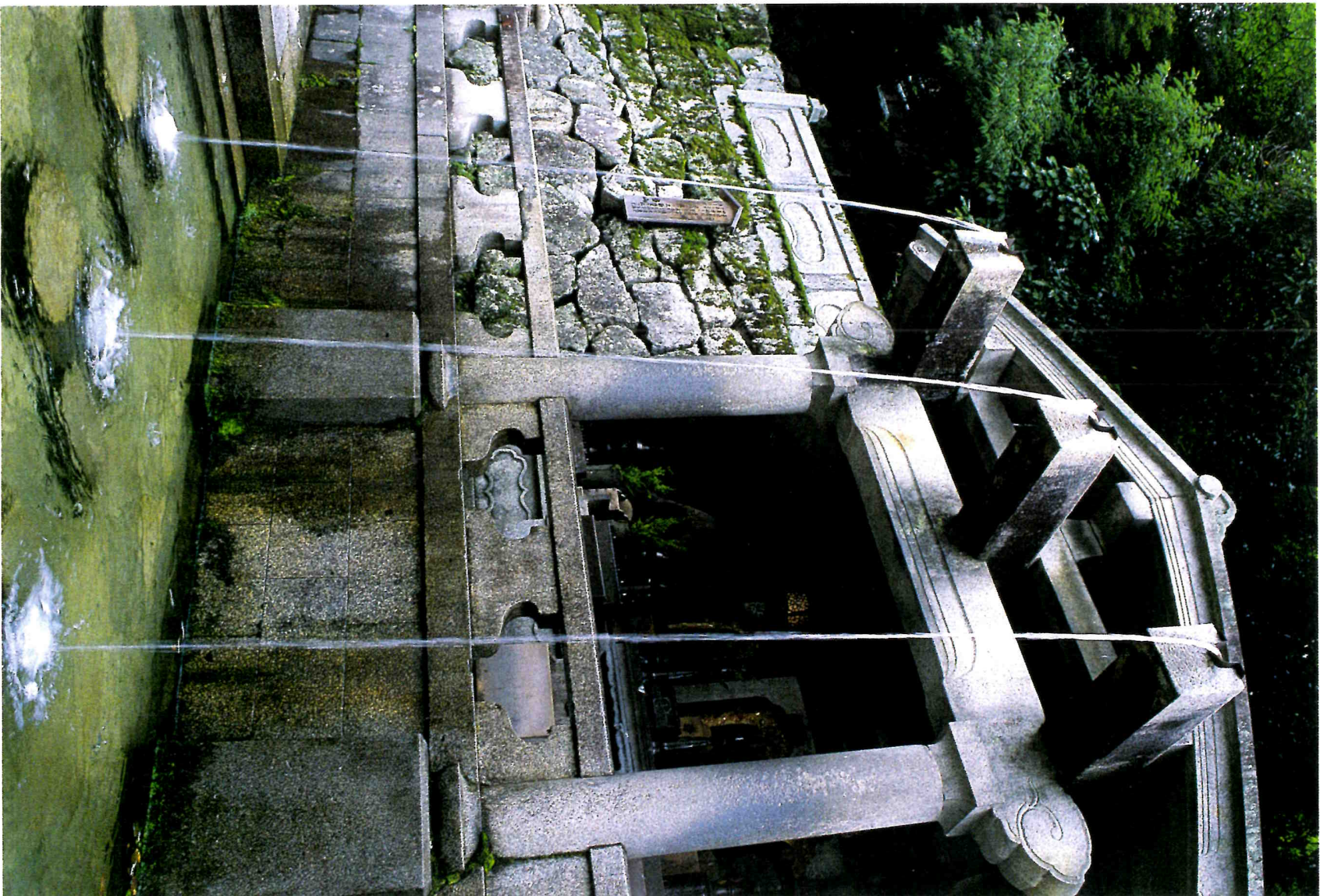


写真図版 814 清水寺 (山号 音羽山)

『清水寺』<sup>別冊</sup>森清範<sup>大泉</sup> 田辺聖子 淡交社 平成20年10月7日発行 13頁参照  
277

・カネ 左下  
 ・左頁の左下(字順)に  
 載せ下せ。

5,626<sup>P</sup>



278

『<sup>刊</sup>聖蹟図版 815 清水寺の音羽の滝』  
 『<sup>刊</sup>清水寺の森清範回田辺聖子波交社』 平成20年10月7日発行  
 『<sup>刊</sup>高さは約4mの滝水垢離の場となる』 22~23頁参照

科 (京都市の東部) ・醍醐の二村を總べたり」

という。(「帝國地名辞典」太田爲三郎、名著出版〈山科〉。

「広辞苑」〈山科〉参照)

(2)また、

〈音羽の滝〉は、京都市東山区清水寺(山号、音羽山)の

「音羽の滝」など同名のものが二、三ある

という。(「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、三七七

頁、注一九。「日本社寺大観」名著刊行会〈清水寺〉。「広辞苑」

清水寺〉、位置図版 814、清水寺の音羽の滝、参照)

贈歌の冒頭の「犬上」(小野氏の本拠地近江国の地名)に

対応させて、——近江の采女は、答歌の冒頭に「山科」

(天の帝が居処としておられる山城国の地名)を歌い込んだのだ。

木原の山は「わが名もすなと御門のよませたまひけむ」とある。いとむかし

りゐて帝を恋ひ慕った歌」を載せている。

なお、『古今集』の編纂者が、あえてこの歌をここに移

したようである。こう記されている。

「思ふてふ言の葉のみや秋を経て」下

「本来、「思ふてふ言の葉のみや秋を経て」の歌(六八八)

の次にあつた歌を、ここに移した」

5,627 P

(上) 2字分 75414 562612

衣通姫の独りゐて帝を恋ひ奉りて

わが背子が来べき筈なりささがにの

蜘蛛のふるまひかねてしるしも

衣通姫が独りおられる時に、帝(通常は允恭天皇と考え

られてゐる)をお慕い申しあげて詠んだ歌。

〔今晚は、我が背子(夫・恋人)が訪ねてきてくれそうだ

わ。それが蜘蛛の動作から予て分かつて、本当に嬉しい〕

■これは、——『日本書紀』允恭八年二月条所載の記事と

酷似している。こう記されている。

「八年二月に、藤原に幸す。密に衣通郎姫(皇后忍坂大中

姫の妹)の消息を察たまふ。是夕、衣通郎姫、天皇を恋び

たてまつりて独居り。其れ天皇の臨せることを知らずして、

歌して曰はく、

我が夫子が来べき夕なりささがねの

蜘蛛の行ひ是夕著しも

天皇、是の歌を聆しめて、則ち感でたまふ情有します。

云々」

とある。

■しかしながら、我が国最古の勅撰の正史『日本書紀』に

記載されている歌を、『古今集』に掲載してみても全く意

味の無いことである。

そう考える時、平安時代に「衣通姫」と称された女

性が、類似した歌を作ったのであろうと推察される。

とすれば、『古今集』にいう「衣通姫」とは、一体誰の性か、

誰なのだろうか。

全くの想像でしかないが、小野小町の孫娘（近江の采女）のことを「衣通姫」と称しているように思われる。

すでに述べたように、小町の母は「衣通姫」と呼ばれて

いた。そして小町は「古の衣通姫の流なり」と評された。

（第九十五章〈衣通姫〉・〈衣通姫の流なり〉の項において既述

）**同じく**、小町の孫娘もまた、「古の衣通姫の流なり」と

評された。ここで同様に、小町の孫娘もまた、「古の衣通姫の流なり」と

評された。そして小町は「古の衣通姫の流なり」と評された。

（第九十五章〈衣通姫〉・〈衣通姫の流なり〉の項において既述

）**同じく**、小町の孫娘もまた、「古の衣通姫の流なり」と

評された。そして小町は「古の衣通姫の流なり」と評された。

（第九十五章〈衣通姫〉・〈衣通姫の流なり〉の項において既述

）**同じく**、小町の孫娘もまた、「古の衣通姫の流なり」と

評された。そして小町は「古の衣通姫の流なり」と評された。

（第九十五章〈衣通姫〉・〈衣通姫の流なり〉の項において既述

）**同じく**、小町の孫娘もまた、「古の衣通姫の流なり」と

評された。そして小町は「古の衣通姫の流なり」と評された。

5.628

巧がその特色となっている。

(2) 『古今集』に歌を撰ばれた歌人は、衣通姫と安倍仲磨以

外はすべて平安時代にはいつてからの人である。

という。（『日本史辞典』東京創元社〈古今和歌集〉。『古今和

歌集』日本古典文学全集、小学館、一九頁参照）

■察するところ、

〈小町の孫娘は、自分自身を「允恭天皇の皇后の妹（衣通

姫）」になぞらえ、……『日本書紀』允恭八年二月条所載

の「衣通郎姫が独り居て帝を恋ひ慕った歌」に極めて酷

似した歌を作ったのであろう

と思われる。

それでは、「衣通姫」（近江の采女、小町の孫娘）が恋い

慕った帝とは、——どの天皇のことであつたらうか。

① 醍醐天皇（八八五〜九三〇。在位八九七〜九三〇）（寛平九

）子として生まれ、八九七年に十三歳で元服し、同日父から

譲位されて皇位についた。九三〇年九月に皇子朱雀天皇に

譲位し、一週間後に没した。

在位期間は三十三年の長きにわたり、その在位時代は

「延喜の治」と称され、後世には天皇親政の聖代として意

天孫降りる見本は古回三空の山に出下月女

498

498

498

498

498

498

498

498

498

498

498

小倉天皇が、和歌集降臨詠を皇別歌に

⑦549219

識された。またこの時代には『日本三代実録』『古今集』

『延喜格式』などの編纂も行なわれ、前後を画する一時代

といえる。陵墓は、京都市伏見区醍醐古道町の後山科陵で

ある。後山科帝とも、小野帝とも称される。(『日本史辞典』

東京創元社『醍醐天皇』、『広辞苑』(醍醐天皇)参照)

②朱雀天皇(九三三〜九五二。在位九三〇〜九四六(延長八

歳)で、九三〇年九月に讓位されて皇位についた。時に八

歳だった。九四六年に弟成明親王(村上天皇)に讓位して、

太上天皇となり、九五二年に三十歳で崩じた。陵墓は、京

都市伏見区醍醐の醍醐陵である。(『日本史辞典』東京創元

社『朱雀天皇』、『広辞苑』(朱雀天皇)参照)

の二人の天皇のうち、どちらかであろうと考えられる。

もっとも先に仮定したように、

「小町の孫娘が、醍醐天皇の延喜四年(九〇四)に生まれ

た」(第九十五章「小町の享年について」の項参照)

とすると、

■朱雀天皇誕生の九三年には、醍醐天皇三十九歳、小町

の孫二十歳、朱雀天皇一歳。

■醍醐天皇讓位(崩御)の九三〇年には、醍醐天皇四十六

歳、小町の孫二十七歳、朱雀天皇八歳。

19才の差

823 39才  
885 38才  
38 38

5.629

■朱雀天皇讓位の九四六年には、小町の孫四十三歳、朱雀

天皇二十四歳、

であった計算になる。

朱雀天皇と小町の孫娘とが恋仲になったとは考えにく

この物語では、「醍醐天皇」と「衣通姫」(小町の孫娘。

近江の采女)が互いに愛しあつたと考えてみたい。

醍醐天皇の祖父は光孝天皇であり、小町の孫娘の祖父も

同じく光孝天皇だったのであろう。

すなわち、醍醐天皇と小町の孫娘とは、従兄弟同志の関

係にあつたように思われる。

こうしたことから、二人は親しくなつたのかも知れない。

なお、小野小町の場合、父が小野氏だから、藤原氏の反

発も非常に大きかつたと想像される。

しかし、小野小町の孫娘の場合、父が光孝天皇の皇子で

あつたとすれば、藤原氏からの反感は少なかつたであらう

とも思われるのだが、…:はたしてどうだつたのだろうか。

いや、以下に述べる様に、現実にはなかなか厳しいもの

だつたように見受けられる。

\*

醍醐天皇は近江の采女(小町の孫娘)を愛しく思つてお

光孝 下野 孫娘  
○下 宇多 藤原

5,630<sup>P</sup>

られた。

とはいえ、人目につくような恋をしようものならば、小

町の時と同じく好奇の目が集中するだろう。

「やはり、お二人共、血はあらそえないわね」

などと言って、こぞって離し立てるに違いない。

そうなれば、小町と同様、小町の孫娘も憂き世の悲しき

に涙することになるかも知れない。

醍醐天皇は、再び近江の采女（小町の孫娘）に、先の歌

と同じ歌をお贈りになった。

犬上の鳥籠の山なる名取川

いさと答へよわが名洩らすな

「二人だけの秘密なのですよ。決して私の名を洩らしては

なりません」

醍醐天皇から御歌を贈られた近江の采女は、次の返歌を

奉った。（古今集」卷十三、恋歌三、六六四）

山科の音羽の山の音にだに

人の知るべくわが恋ひめかも

この歌、ある人、近江の采女のとむ申す

「念を入れて再度お申し越し下さいましたが、全く御心配

には及びません。私は音（単なる評判、うわさ）さえもた

えず、決して他人に知られるような恋はいたしませんとも」

一見重出であるかのように見える近江の采女の二つの歌

を、『古今集』の編者は何故載せたのだろうか。

「きつと、大きな意味があったからに相違ない」

と我々は考えねばなるまい。

\*

醍醐天皇は、人の目を気にしながらも、小町の孫娘との

逢瀬をたのしんでおられたのであろう。

しかし、天皇のそれと落ち着かない挙動不審な様子

が、ついに臣下の者達の目にとまってしまうようである。

「おや陛下、今日もまたお出掛けでございますか。最近、

あらぬ噂が飛び交っておりますゆえ、くれぐれも御用心あ

そばされますように」

醍醐天皇は、

「これは困ったことになってしまったぞ」

とお思いになった。

ここに天皇は、忠告してくれた者を近江の采女（小町の

孫娘）のもとへお遣わしになった。

「まあ、それで逢いに来ては下さらないのね」

近江の采女（小町の孫娘）は泣きながら歌をしたため、

使いの者に持ち帰ってもらった。（以下、「古今和歌集」日

本古典文学全集、小学館、二七九頁参照）

醍醐天皇が手にされた文には、次の歌があった。(古今

集」卷十四、恋歌四、七〇四)

里人の言は夏野の繁くとも

かれゆく君に逢はざらめやは

〔里人たちの噂は夏の野に茂る雑草のようにわずらわしい

ものです。そしてその草のように、やがてあなたの心は枯

れ(離れ)ていくのでしようが、一人残される私は逢わな

いですませられるものでしょうか。たとえ噂が繁くとも、

お逢い致しとうございます)

醍醐天皇は、近江の采女を哀れにお思いになった。

〈いま逢うわけにはいかないが、私の苦しい気持を伝えて

やりたい〉

こうお考えになった醍醐天皇は、近江の采女の歌の中に

ある「言」と「繁く」を折り込んで一首お作りになり、使

者にお持たせになった。

『古今集』卷十四、恋歌四、七〇二に、こう記されている。

梓弓ひきのつぐら未つひに

わが思ふ人に言のしげけむ

この歌は、ある人、「天の帝の近江の采女に賜ひけ

る」となむ申す

「梓弓」は次の句の「ひき」の枕詞。「ひきの」は今の大

5,631P

阪府南河内郡日置野か。「つぐら」は蔓草の総称。第一、

二句が三句以下の「末……しげけむ」の意味の部分にかか

る序詞。「末」は最後の意と草の先端の意とにかかると

が思ふ人に言のしげけむ」は私の愛する人に言葉(噂)が

うるさくなるだろう、の意。「天の帝」は「天皇」の意味

の普通名詞。「采女」は天皇の食事に奉仕した地方出身の

女性のことである。

(大意)日置野に生える草の蔓は茂って手がつかれない

有様だが、私が愛する人についても、先々つひには、困っ

た噂が煩わしいばかりに繁しく立てられそうです。だから

自分の間、お逢いしないほうがよいでしょう。

近江の采女(小町の孫娘)は、逢えないことを悲しく思

いはしたが、

「末つひにわが思ふ人に言のしげけむ」

という帝の優しい心遣いを嬉しくも思った。

しかも、自分の歌の中の二つの言葉「言」と「繁く」が

詠み込まれていることに、いたく感激した。

本当に思いやりのある、愛情に満ちた歌であった。

ここに近江の采女(小町の孫娘)は再び歌を詠んで、使

者に託した。

『古今集』卷十四、恋歌四、七〇三には、こう記されてい

夏びきの手引きの糸を繰り返し  
言しげくとも絶えむと思ふな

この歌は、「返しによりて奉りける」となむ

夏に手で引き出す糸。その糸は夏の蚕の糸とする説(平

安末、鎌倉初期の歌人・歌学者、願昭)と、夏の麻の糸とす

る説(江戸前期の国学者・歌人、契沖)がある。

(大意)夏になると女たちは細い手先で糸を繰りますが、

繰り返し

決して縁を絶とうと思わないでください。手引きの糸のよ

うに、長く長く絶えないでほしいという気持でいっぱいで

す。

つまり、天皇と近江の采女の贈答歌であるが、――答歌

の初句・第二句・第四句・第五句には、贈歌の語句が巧み

に繰り返し用いられている。

さらに、近江の采女が詠んだと思われる先に述べた歌

『古今集』卷十四、恋歌四、七〇四の、

里人の言は夏野の繁くとも

かれゆく君に逢はざらめやは

まで併せ考えると、答歌が実に巧妙に歌われていることが

分かる。

5,632<sup>p</sup>

284

「夏・ひき・言・しげ・思ふ」

といった語句が、綾なすごとく織り込まれているのである。

さすがに小町の孫、面目躍如というべき歌である。

なお、地方出身の通常の采女であったならば、

こんななまでに激しく帝を慕う歌を作って届けることは

遠慮し、差し控えたであらう

と思われる。

濃い血のつながりがあったからこそ、このような恋歌を

詠み得たのではなからうか。

\*

もっともこののち、醍醐天皇と近江の采女(小町の孫娘)

との仲がどうなったのかは、知る由もない。

①世間の噂に負けて、二人の心は離ればなれになり、細い

縁も絶えてしまったのだろうか。

あんなにまでも帝を恋い慕った近江の采女は、哀れ、失

意のうちに日々を過ごすごことになったのかも知れない。

②それとも、苦難を乗り越えた二人は結ばれ、近江の采女

(小町の孫娘)は醍醐天皇の妃となったのだろうか。

全く定かでないが、この物語では、

〈小町の孫娘は、未っひに、醍醐天皇の妃になったのであ

らう〉



と考えてみたい。

もしも実らぬ〈天皇と近江の采女の恋〉であつたものな

らば、——『古今集』に掲載されることなど無かつたであ

らう、と思われるからである。

そしてそう考えるとき、これらの「天皇と近江の采女の

恋」にまつわる一連の歌は、

〈醍醐天皇が、近江の采女を妃とされた後に、……過ぎた

日のあれこれ様々なことどもを懐かしく思い返す「後日譚」

として披露された〉

もののように思われる。

すなわち、左註に記されている「ある人」とは、醍醐天

皇その人であるうと推察される。

左註だけを抜き出してみよう。

(664) この歌、ある人、近江の采女のとなむ申す。

(702) この歌は、ある人、「天の帝の近江の采女に賜ひける」

となむ申す。

(1108) この歌、ある人、天の帝の近江の采女に賜へると。

とある。

そもそも、「天皇」と「近江の采女」の二人だけしか知

らない筈のこれらの歌を、他の誰が公表し得ようか。

\*

5,633P

そして先に述べたように、『後撰和歌集』巻第十八一一

二六七には、

あだなる名たちて言ひ騒がれける頃、ある男ほのか

に聞きて、あはれいかにぞとひ侍ければ

小町が孫

うき事をしふる雨のしたにして

わがぬれぎぬはほせどかはかず

とある。

ここにいう「ある男」とは、もしかしたら、醍醐天皇の

ことなのではなからうか。

噂が立って、会うにあえない状況下にあるながらも……

醍醐天皇は、ほのかに小町の孫のことを聞き出し、胸を痛

めておられたのであろう。

「あはれ、いかにぞ」

とお尋ねになつたこまやかな心づかいが、詞書の内から伝

わってくる。

### 近江更衣

さらに、『後撰和歌集』巻第六一一七七〜八には、延喜

帝（醍醐天皇）と近江更衣との贈答歌がある。

小町の孫娘が、母の服喪の為に、近江の小野の里へ帰つ

ていた時、醍醐天皇から文が届いたのであるか。

なお、当時ぶく(服喪)の期間は、令の定めでは一年間

とされていた、という。(後撰和歌集「工藤重矩校注、和泉

書院、五九頁参照)

こう記されている。

ははのぶくにてさとに侍けるに、せんだい(先帝。

醍醐天皇)の御ふみたまへりける御返ごとに

近江更衣

(277) さみだれにぬれにし袖にいとどしく

つゆおきそふる秋のわびしき

(母の死が五月だったのであろう)五月雨の頃にあんなに

も乱れ泣いて濡れた袖に、さらに一層、露を置き添えて濡

らす秋の、何と悲しいことでしょう)

御返し

(278) おほかたも秋はわびしき時なれど

つゆけかるらむ袖をしぞ思

(一般的に言っても秋は悲しい時ですが、とりわけ涙で濡

れているであろうあなたの袖を、思いやっております)

ともあれ、『後撰和歌集』に掲載されているこの贈答歌

から、

〈延喜帝(醍醐天皇)と、近江更衣との間に、幾たびも文

や和歌がとり交わされていて、かなり親密な仲であった

ことが推察される。

●また、おそらく、

〈醍醐天皇を恋慕った「近江の采女」は、この頃には

「近江の更衣」と呼ばれていたのだろう〉

と想像される。

更衣は、女御の次位にあって、天皇の衣をかえることを

つかさどり、天皇の御寝にも侍したという。(「広辞苑」〈更

衣〉(御寝)参照)

\*

あるいは、そんな時のことであつたらうか。

醍醐天皇は、恋しい更衣の喪服姿をご覧になった。

『新古今和歌集』巻八・八五二に、こう記されている。

更衣の服にて参れりけるを見給ひて

延喜御歌

年経ればかくもありけり墨染の

こは思ふてふぞれかあらぬか

〔年が寄ると(先に述べた時)は十九歳ほど年が違つていた

のであろう)、このようにもなるものだ。墨染の喪服を着

ているこの子は、わたしの思っているという子なのか、そ

れとも別の子なのか。どうもはつきりしない)

若い女性が喪服を着て憂いをふくんでいる時、平常とは一変していじらしく見える。それをお年のせいかととぼけられたのである。

なお、「こ」に、「子(更衣のこと)」と、これ、という意の「こ」とがかけられている。「新古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、二六九頁参照)

●この歌から推しはかると、「いわば、あまりにも当然すぎることながら、醍醐天皇の方が、近江更衣(更衣)よりも、かなり年上

だったのであろう」と思われる。

それなのに、どうしたことか、……一般的には全く正反対の解釈がなされている。

少々やこしいが因みに述べて、  
「近江更衣は更衣源周子の別称である」  
と解説されている。「新古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、三五九頁、卷十三一一七一の注参照)

より詳しく述べて、  
「更衣源周子(周子ともいう)は、生年未詳。朱雀天皇の承平五年(九三五)〔一説に、承平六年二月〕没。醍醐天皇

5,635p

の更衣。右大臣源唱の娘。近江更衣と呼ばれた。左大臣源高明の母にあたる」

という。「新古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、六〇七頁。「国書人名辞典」岩波書店〈源周子〉参照)

だが、醍醐天皇(八八五、九三〇)よりも、源周子(右大臣源唱の娘)の方がずいぶん年上だったように見受けられる。

①醍醐天皇は、光孝天皇の仁和元年(八八五)一月十八日に誕生された。「広辞苑」。「日本史辞典」東京創元社。「国書人名辞典」岩波書店。等参照)

②一方、源周子(源唱の娘)は、その前年に当る光孝天皇の元慶八年(八八四)六月二日、すでに宮中で奉仕していたと解される。

『三代実録』光孝天皇の元慶八年(八八四)六月二日条に、「源朝臣周子」の名が記されており、  
「……源朝臣周子。源朝臣蜜子廿五人預」時服(その時節の着物)月俸(毎月給料)」とある。

たぶん、  
「醍醐天皇よりも、源朝臣周子の方が、十三歳ほど以上も年上であつたらう」

と推測される。

「醍醐天皇に愛された近江更衣である」と解釈されること  
「醍醐天皇に愛された近江更衣である」と解釈されること  
それでは、いったいどうしたわけで、「源朝臣周子」が  
なまってしまったのだろうか。

実は、『新古今和歌集』に、「醍醐天皇と近江更衣（  
更衣源周子）との贈答歌が掲載されているからである。

『新古今和歌集』卷十三、恋歌三、一七一および一七  
二を見てみよう。

(1111) 近江更衣に賜はせける  
延喜御歌

はかなくも明けにけるかな

朝露のおきてのちぞ消えまさりける  
「あつけなくも明けてしまつた」といふ。朝露が置いて、起  
き出でのちは、命がいっそう消え入りそうに思われること

夜の床を共にして別れる朝。……後朝のお作である。  
名残り惜しい夜のはかなさの感から、はかない朝露を点  
出し、命の消えまさる感へ。時間的事実の推移に即した、  
愛惜の情感の流れが美しい。

\* 「はかなくも」は、「あつけなくも」の意である。「朝  
露」は、「おき」の枕詞であり、後朝の朝に置いた露をき  
かせている。「おきて」（起きて）は、「朝露」の縁語であ

5,636P

り、「置きて」をかけている。「消え」は、「朝露」の縁語

である。

御返し

(1112) 朝露のおきつる空も思ほえず

更衣源周子

消えかへりつる心まどひに

「朝露が置かれていたのかどうか、起きた時のことさえ  
も、はつきりとはわかりません。心の乱れで、命が消えて  
しまいそうな気持でありましたから」

贈歌の「朝露のおきてのちぞ消えまさりける」の心を  
さらに強めて自身の心とした返歌で、心憎い調和である。

\* 「朝露」は、「おき」の枕詞。「おきつる空も思ほえず」  
は、「起きた時のこととはつきりとはわからない」の意で、  
「おき」（起き）に「置き」をかけ、「朝露」の縁語として

いる。「消えかへりつる心まどひに」は、「命が消えてしま  
いそうな気持であった心の乱れで」の意味であり、「消え」  
は「朝露」の縁語である。（新古今和歌集）日本古典文学全

集、小学館、三五九頁参照

近江更衣（更衣源周子）のこの返歌から、

「朝露がはかなくも消えゆくような、ういういしい恥じら

い」

が感じ取れる。

第547回 山犬君  
第558回 醍醐天皇  
次々  
参照

5,637P

カラ  
右顔の上方  
に掲載。  
・限夜一杯  
大きく、  
はみださせ  
下さい。

\* 鎌倉  
初期。  
著作権は  
不要と  
思われ  
ます。



コナ  
13QG  
コナ  
14QG

第557回 <sup>コナのきみ</sup> 小大君 (佐竹本三十六歌仙繪)

コナのきみ  
28SPと8行

『宮廷を彩る才女』 暁教育図書、昭和58年2月1日発行、17頁参照。

289P

・カラ一  
 ・左肩の上粉ヒ  
 限定一杯 作り出されて大主に搭載下か。

290<sup>P</sup>



5,638<sup>P</sup>

290

(荻原天泉筆)

→ 右のあ

おきつら

1409 醍醐天皇 (小野帝とカ)

第 558 図 醍醐天皇 (小野帝とカ)

1309

『名画にみる国史の歩み』編者 所功 近代出版社 平成12年4月19日発行 又頁参照可  
 藤原時平回菅原道真らの神佐の下に国を治め、後世延喜の治と稱された。  
 古今和歌集と勅撰  
 昔景は、「真床覆余」であろうか。

↑ 紀元1568年(延暦24) 西暦1440(延)

たしかに、贈歌と答歌を併せて考えると、  
〈近江更衣は、更衣源周子である〉  
ということになる。

しかし、『新古今和歌集』に記載されている「近江更衣」  
(「更衣源周子」が、『三代実録』中の「源朝臣周子」と同  
一人物なのかどうかは分からない、というべきであろう。

あるいは、  
〈光孝天皇と小町との間に生まれた男児は、出生後ただち  
に「源姓」を賜わり、……そしてその男児の娘は、「源周  
子」と呼ばれたのではなからうか〉  
などと想像される。

●つまり、  
〈新古今和歌集〉に記載されている「近江更衣」(「更衣  
源周子」と、『三代実録』中の「源朝臣周子」とは、同姓  
同名であるとはいえ、別人だったのだから)と  
と想像される。

●ここに、「周子」という名を探してみると、  
(1)『続日本後紀』仁明天皇の承和十四年(八四七)閏三  
月十五日条に、「山口忌寸周子」  
(2)『三代実録』光孝天皇の元慶八年(八八四)二月二十  
六日条に、「良岑朝臣周子」・「菅原朝臣周子」

5,639P

などと記されている。  
平安朝当時、「周子」という名は決して珍しくなかった  
のであろう。

●また参考までに述べると、源周子の父源唱の名が、『三  
代実録』元慶元年(八七七)正月三日条、仁和二年(八八  
六)二月二十一日条に見られる。  
源唱は、嵯峨源氏である。(後撰和歌集「工藤重矩、和泉  
書院、三七二頁参照)

●源周子の子であるという源高明については、現在、次の  
ように解釈されている。  
「平安中期の廷臣。醍醐天皇の第十皇子(第十一皇子とも  
いう)で、延喜十四年(九一四)生。天元五年(九八二)  
十二月十六日没。六十九歳。朱雀天皇(九三三〜九五二)  
および村上天皇(九二六〜九六七)の兄弟にあたる。

延喜二十年(九二〇)、勅書により兄弟六人と共に源姓  
を与えられ、臣籍に降下。天慶二年(九三九)参議。康保  
四年(九六七)正二位、左大臣。  
安和二年(九六九)、『安和の変』(藤原師尹らが左大臣源  
高明の失脚を企てた事件)に絡み、大宰権帥に左遷される  
こととなった時、高明は、〈直ちに出家して京に留ま  
りたい〉と請願したが許されず、筑紫に配流。

982  
914  
688  
687  
920年 生か。





聞えるように響き渡ったとは考えにくい。

●あえていえば、

「日照りのしければ、雨乞ひの歌よむべし」

という醍醐天皇の宣旨が下り、——かつての小町の『雨乞ひの歌』を、小町の孫娘が祭壇の前で詠んだのかも知れない。

●この場合も、神宮文庫本系統の『小町集』に記されていることは、あながち誤りだとは言えず、

〈醍醐の御時に、日照りが続いたので、雨乞ひの歌をよむようにという宣旨が下り、

「ちはやぶる神も見まざば立ち騒ぎ……」

という小町の和歌が、小町の孫娘によって歌われた〉

といった意味に解される。

●なるほど、現代の我々には、『小町集』に、

「醍醐の御時に、云々」

とあることが奇妙に思えるし、編纂者がうかつにも間違っ

てしまったかのように感じられる。

とはいえ、——実は、そう思えるということこそ、編纂者達の狙い所だったのかも知れない。

すなわち、編纂者達は、一見「誤謬」とみまごうような

記述をおこなって、——「粹に感じていたのだから」と想

5,641<sup>p</sup>

像される。

そしてまた、平安朝当時の貴族社会全体が、そうしたことを暗黙のうちに容認していたのであると、と推察される。

\*

ところで、この『雨乞ひの歌』については、さらに述べ

なければならぬ

群書類従本『小大君集』にも、ほぼ同様のものが記され

注目される。

醍醐の御時に、日照りのしければ、雨乞ひの歌よむ

べき宣旨ありて

千早振神も見まざばたちさばぎ

天のと河のひぐちあけたま

というのである。

一説に、この『雨乞ひの歌』は、『小大君集』に存する

ゆえに小大君の歌だとする主張がある。〔小野小町追跡〕

片桐洋一、笠間書院、七五、一〇頁参照)

しかし、三条院が春宮であった時(九八六、一〇一一)

の女蔵人で、長保(九九九、一〇〇三)・寛弘(一〇〇四、

一〇一一)頃生存していたと考えられる小大君(名は左近)

では、——ほぼ百年前の『醍醐の御時』(八九七、九三〇)

に当然ふさわしくない。〔広辞苑〕〈小大君〉。「世界大百科

事典「平凡社『三条天皇』(参照)

なお、『小大君集』の流布本系は、

小大君、父母不詳

三条院春宮之時女藏人、左近

という。(「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、一二頁参

照)

また、後述するように、本居宣長は、

「小大君は、小大進という名を省略したものだ」

という。

\*

それでは、どう考えたらよいのだろうか。

■ここに仮りに、

●小町は、「大眞」(＝楊貴妃)になぞらえられて、「太眞」

もしくは「大眞」と称された。

●醍醐天皇の妃となった小町の孫は、「太眞」(大眞)の孫

娘という意味で、「小太眞」もしくは「小大眞」と称され、

…また、「小太」「小大」の二文字をとって、「小太君」・

「小大君」とも呼ばれた。

●小町の孫娘の血筋を引く、西暦一〇〇〇年頃生きた女性

は、当初女藏人(内侍・命婦)の下の女官として雑役に従事し

た下臈)であったといえ、——最高位が大進(中宮職・

5,642<sup>p</sup>

皇太后宮職・大膳職・東宮坊などの判官の上位)の位にあつ

たから、「小大眞の子孫」という意味を込めて「小大進」・

「小大眞」・「小大君」と呼ばれた。(「広辞苑」女藏人)〈天

進〉(参照)

と仮定してみよう。

例をあげると、和泉式部の娘は、小式部と呼ばれたのだっ

た。(「小野小町」前田善子、三省堂、一五八頁参照)

また、「太」と「大」とは酷似しており、中国では「太

極殿」、日本では「大極殿」と記されることが多い。そし

て「太宰府」とも「大宰府」とも記述される。

■つまり、

●小町の孫娘は、「小大眞」・「小大君」

●その子孫の女性は、「小大進」・「小大眞」・「小大君」

と呼ばれたのだから、と想像される。

■しかし、我が国の往古の風習を引き継いで、

〈親も子も、区別なく、同一人物とみなされることが多々

あつた〉

と推察される。(第三十七章「天石窟の儀式」等参照)

■よするに、

〈小町の血筋を承けた女性は、皆、「小大眞」・「小大君」

などと呼ばれたのであろう〉

294

と思われる。

■とすれば、『小大君集』には、

●延喜四年(九〇四)ころ生まれた小町の孫娘「小大君」

●三条院が春宮であつた時(九八六、一〇一一)の女藏人

で、長保(九九九、一〇〇三)・寛弘(一〇〇四、一〇一一)

頃生存していたと考えられる「小大君」

等の複数の女性の歌が納められているのかも知れない。

■そうしたわけで、

〈十世紀後半から十一世紀初めにかけて活躍したと考えら

れている小大君の歌集に、——ほぼ百年も前の「醍醐の御

時」に歌つたという『雨乞ひの歌』が含まれているのでは

なからうか？

と推測される。

■なお、先に述べたように、『小大君集』の流布本系に、

小大君、父母不詳

三条院春宮之時女藏人、左近

とある。(「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、一二頁参

照)

小町の血筋を引く女性達の多くの父母の名を公にすること

とは、……《なにかと具合の悪い事情があつて》差し控え

られたものと思われる。

5,643<sup>P</sup>

295

\*

■因みに述べると、平安時代の宮中の女官達は、正月の女

官叙位の昇進を請願する為に、『切杭の申文』という申請

書を朝廷に提出したという。

(1)『切杭』は、木の切株と同じ言葉である。

(2)また、木の切株から生え出てくる新芽「孫生」(＝葉)

にたとえて、

《正月の女官叙位の時、女官などが自分の功勞に母の功勞

の年数を合わせて叙位を申請したことをも、『切杭』と称

した》

といひ、——その文書を、『切杭の申文』と呼称するのだ

という。(「広辞苑」〈切杭〉〈申文〉〈葉〉参照)

■「親の位と年とを、代々受け継いでゆく」

という我が国の往古の伝統が、幾分形を変えているとはい

え、なお平安朝に迄も伝えられ、

〈自分の功勞の年数に、母の功勞の年数を加えて、叙位を

申請する〉

という風習になつたのだらう、……と想像される。

■そして、こうした『切杭の申文』の風習が平安時代に存

在したことから推察する時、

〈小野小町の功勞が孫娘へ、そしてその孫娘の功勞が曾孫

娘へと次々に伝えられていったのであるう

と想到される。

\*

そもそも、『小町集』に小大君の歌が入っていると言、問題にした最初の人は、本居宣長であった。『玉勝間』四の巻に、こう記されている。

三条院の女蔵人左近を小大君ともいへり。そは小大進といふ名をはぶきていへるなれば、こだいの君とよむべし。

「こおほきみ」とよむは、ひがごと也。此人小大進なる証は、「栄花物語」見はてぬ夢の巻に「あるはなくなきは数そふ世の中にあはれいつまであらむとすらむ」とい

へる歌のよみ人、東宮の女蔵人小大進とあり。東宮は三條院也。此歌「小町が集」といふ物にもあり。すべてこの「小町集」は、いとも信がたき物にて、此小大ノ君が歌の多かるは、小大は小町にまぎらはしつるなるべし。

然るを、「新古今」に、かの歌を「小町集」よりとりて、小町がとて入られたるは、誤也。

と述べ、小大君の読み方からはじまって、ついでに『小町集』は信じがたいものなりというのである。

しかし、流布本(群書類従本)『小町集』八一番には、

見し人のなくなりし頃

5,644P

あるはなくなきは数そふ世の中に

あはれいづれの日まで嘆かむ

とあって、下句が違ふ。(小野小町追跡)片桐洋一、笠間書院、一〇七、一〇九頁参照)

恐らく、小町の血を引く「小大進」(小大君)は、小町の歌の下句を少し変えて詠んだのであろう。

そして当時の人々は、こうしたことを寛大に受けとめていたに違いない。

察するところ、小大君は、小町の血筋を承けている(註)を大いに誇りに感じて、——小町が作った歌(もしくは酷似した歌)を己の歌として晴れがましう詠んだものと思われ。

なお、ここに「東宮の女蔵人小大進」とあるが、……「東宮の女蔵人小大君、つまり後の小大進」と補なつて解釈してみたい。

\*

参考迄に述べると、本居宣長が「此小大ノ君が歌の多かるは」と述べているように、——『小町集』には、『小大君集』に存する歌(もしくは酷似している歌)が実に計七首もある。次の歌である。

①林家旧蔵本『小大君集』に、

世のはかなきこと人々のたまふに

あるはな~~く~~なきは数~~そ~~ふ世の中に

あはれいつまでい~~は~~むとすらむ

とある。

「いはむとすらむ」は、「いきむとすらむ」の誤写である

う、という。「采花物語」中の小大進とは別人の小大君が詠

んだ歌なのかも知れない)

残りの六首を、宮内庁書陵部本『小大君集』の図書番号

で示しておこう。

「あしたづの雲ぬの中にまじりなば」

な~~ど~~いひてうせたる人あはれにおもほゆるころ

②四 ひさかたの空にたなびく浮雲のうけるわが身

は露草の露のいのちもまだきえておもふこ

とのみもろこすげ……

恋も別れもうきことはつらきもしらぬわが身

こそ心にしみて袖のうらのひる時もなくあ

はれなれ……

いつか恋しき雲の上の人とあひ見てこの世に

は思ふことはなき身とはなるべき

③四 おきのゐて身を焼くよりもわびしきは

みやこしまべの別れなりけり

5.645P

4冊 103P 149P

297

④四 宵々の夢の魂あしりかく

ありかでまたむとぶらひにこよ

⑤四 みるめかるあまのゆききの湊路に

なこそその関も我はすゑぬに

醍醐の御時に、日照りのしければ、雨乞ひの歌よ

むべき宣旨ありて

⑥四 ちはやぶる神もみまさばたち騒ぎ

天の門川の樋口あけたまへ

やりみづに、桜の花流るるを見て

⑦四 澗の水木の下近く流れずは

うたかた花をありと見ましや

以上の七首が、『小町集』と『小大君集』の両方に掲載

されている。(小野小町追跡「片桐洋一、笠間書院、一〇八

〜一二三頁参照)

### 井手寺

醍醐天皇と、近江の采女とが、かまびすしい噂の飛び交

う中で、どのようにして愛をはぐくんでゆかれたのかは分

からない。

しかしながら、二人共に光孝天皇の孫という高貴な出自

であったから、醍醐天皇が近江の采女(小町の孫娘)

小野小町 1950年2月6日



小野小町 220<sup>P</sup>  
下1行 字アキ 5,647<sup>P</sup>

柿本人麻呂および山部赤人は、共々曰歌聖と  
 稱よさされている。  
 〔では「衣通姫」とは、允恭天皇の妃ひ（弟姫）  
 のことなのだろうか。〕  
 ・そういかも知れない。  
 ・「かし、允恭天皇の妃「衣通姫」が作つた  
 歌として知られてゐるものは極めて少なくて  
 和歌三神の一人として相伝ふたひたりいのかどう  
 かよく分からない。  
 〔あえて述べると、  
 允恭天皇妃の衣通姫  
 〔古の衣通姫の流りなり〕  
 と古今集に仮名序・真名序におりて記され  
 ている小野小町  
 小野小町の孫娘（小大君）  
 の三人をあわせて「衣通姫」と総稱してい。  
 るのではなからうか下などと想像さしる。（今  
 後の検討を待ちたい）

HLV

世のはかなきこと人々のたまふに

あるはなくなきは数そふ世の中に

あはれいつまでいはむとすらむ

とある。

「いはむとすらむ」は、「いきむとすらむ」の誤写である

う、という。(柴花物語)中の小大進とは別人の小大君が詠

んだ歌なのかも知れない)

残りの六首を、宮内庁書陵部本『小大君集』の図書番号

で示しておこう。

「あしたづの雲ゐの中にまじりなば」

なぞいひてうせたる人あはれにおもほゆるころ

② 四 ひさかたの空にたなびく 浮雲の うけるわが身

は 露草の 露のいのも まだきえで おもふこ

とのみ もろこそすげ……

恋も別れも うきことは つらきもしらぬ わが身

こそ 心にしみて 袖のうらの ひる時もなく あ

はれなれ……

いつか恋しき 雲の上の 人とあひ見て この世に

は 思ふことはなき 身とはなるべき

③ 四 おきのゐて身を焼くよりもわびしきは

みやこしまべの別れなりけり

300  
1039p  
149p  
片桐洋一

④ 四 宵々の夢の魂あしりかく

ありかでまたむとぶらひにこよ

⑤ 四 みるめかるあまのゆききの濠路に

なこそこの関も我はすゑぬに

醍醐の御時に、日照りのしければ、雨乞ひの歌よ

むべき宣言ありて

⑥ 四 ちはやぶる神もみまさばたち騒ぎ

天の門川の樋口あけたまへ

やりみづに、桜の花流るるを見て

⑦ 四 滝の水木の下近く流れずは

うたかた花をありと見ましや

以上の七首が、『小町集』と『小大君集』の両方に掲載

されている。(小野小町遺跡「片桐洋一、笠間書院、一〇八

〜一二三頁参照)

### 井手寺

醍醐天皇と、近江の采女とが、かまびすしい噂の飛び交

う中で、どのようにして愛をはぐくんでゆかれたのかは分

からない。

しかしながら、二人共に光孝天皇の孫という高貴な出自

であったから、——醍醐天皇が近江の采女(小町の孫娘)

5,648p



因みに述べて『山城国』の井手寺は丘の上にある。その近傍に『わたりの』と『へる』のふたつは無い。木津川から遙かに遠く離れてる。

を妃とされた後においては、もはや誰一人、とやかく言う者などいなくなつたらうと推察される。

さて、小町の孫娘が醍醐天皇の妃となつたというのに、祖母に当る小町が近江国の関寺あたりに庵を結んで住んでいる。祖母に当る小町が近江国の関寺あたりに庵を結んで住んでいる。祖母に当る小町が近江国の関寺あたりに庵を結んで住んでいる。

天皇の妃の祖母として、それなりにふさわしい身なりをし、立派な寺に住むことが要求されたように思われる。

そこで、小町は、長年にわたって住みなれた近江国関寺あたりの庵を後にして、…山城国綴喜郡井提の里の『井手寺』へやつてきたのであるう、と想到される。

小町は、その寺の名が『井手寺』であることに、胸しめつけられるような悲しさど、なつかしさとを覚えた。

かつて、亡くなつてしまつた息子と夫とを陸奥国に残し、都へ旅立つ時に詠んだ歌を、小町は思い出していた。

おきの井でみをやくよりあかなしきは都しまへの別也けり

「あの井での島に渡つたなら、死霊の意中が聞けるという。あなたの娘子が帝の妃になつたのですよ。今あなたは、どのような思いでいらつしやるかしら。井での山に登つて、あなたのお声を聞きたいわ」

（写真図版 816）井提寺故址（参照）

ここに、小町は歌つた。群書類従本『小町集』に、こう記されている。

井手のやまふきを色も香もなつかしきかな

蛙なくゝゐてのわたりの山ふきの花

二句切れ倒置法のこの歌の歌意は平易である。（小町伝説）

小町は、山城国の『井手寺』に咲く山吹の花を目の前にしながらも、…陸奥国の『ゐてのわたりの』ゐての渡船場に咲いていた美しい山吹の花を、懐かしく思い浮かべていたのかも知れない。（『広辞苑』〈わたりの渡船場〉参照）

（写真図版 817）山吹

井手寺で、小町は、光孝天皇・息子・大江惟章の菩提をとむらつたことであつたらうか。

こうしたわけで小町は、晩年を井手寺で過ごし、この寺に於て薨じたように思われる。

そして又、こうしたわけで、井提寺の『小町塚』は、宮内省の管轄下に置かれることになつたのであるう、と推察される。

（写真図版 818）小野小町之墓（参照）

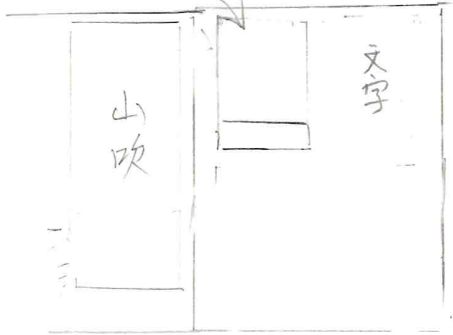
なお、『井提旧地全図』には「大姉の墳、小野小町墓」として描かれている。また、井手は、勧修寺、仙洞御所

5649P

5,650P

・カラー

・右頁の左上1/4に  
載せて下さい。



小野小町 128<sup>P</sup>改

140G

写真図版 816 『<sup>ゑで</sup>井堤寺故址』の石碑

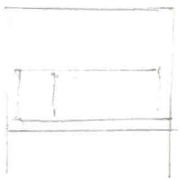
120G  
中野小町

平成17年(2005年)11月30日 著者撮影

カ-

左頂の右粉

(上~下段)に  
はみだして大木  
掘栽下す。



5,651<sup>P</sup>



142<sup>5/24</sup> 中心のわけ

写真図版 817

山坂

1104<sup>5/24</sup> 写真 = 入江泰吉記念奈良市写真美術館

132<sup>5/24</sup> G

『石葉集入門』別冊太陽 日本のにころ 180<sup>5/24</sup> 平凡社 2011年4月25日発行  
142頁参照

・カウ  
・頰の上。左の大柱。はみ出して大柱を掲載下さい。

5,652P



304

1406

写真図版 818

小野小町 208P 上 未4行  
おて  
井手町の『小野小町之墓』

1206 平成17年12月21日 著者撮影  
中野小町

(2005年)

小野小町の墓 甲左の墓に  
NA ZANANON 2 NNN 0 0030 <No. 11> 434 とある

大宮御所の所領として皇室との縁が深かったところである、  
という。(「小町伝説」明川忠夫、現代創造社、九八頁参照)

\*

「おばあさま。私の大切なおばあさま。もともとと長生  
きしていただきたきとうございました」

小町の孫娘『小大眞』(三十六歌仙のうちひとり小大君)

は、かけがえのない祖母であり師でもあった小町が、  
『井手寺』で亡くなり、火葬された時に、…次の歌を詠

んだのではなからうか。

おきのゐて身を焼くよりもわびしきは

みやこしまべの別れなりけり

身を焼くよりもわびしい、都島辺の別れだったに相違な

い。(宮内庁書陵部本「小大君集」一四二番歌)

また小町の孫娘小大君は、

「あしたづの雲ゐの中にまじりなば」

などいひてうせたる人(祖母の小町)を偲んで、宮内庁書

陵部本『小大君集』一四〇番歌を歌ったのかも知れない。

### 小野の里

それでは、小野小町が幼い日々を過ごしたであろうと思  
われる《古京の西北の隅》の方の様子を、もう一度見てみ

5.653 P-1/3

よう。  
千秋の時が流れた現在、小野の里のあたりにさえも、  
千早振る神代のことを知っている人は居ない。

しかしながら村人達は、親から子へ・子から孫へと、儼  
しい姿をした二上ふたがみの山「横山」についての何らかの伝承を

語り継ぎ、あがめ続けて、…いまにまでも至っているの  
であらう。

七国神社の裏手から登って行く細い山道には、朽ちた小  
さな鳥居があり、路傍ろぼうの小堂には、小野良実卿と衣通姫と

思われる木彫りの像が安置されている。  
そして横山の山頂には、小さな小さな祠が、ぽつんと立っ

ている。  
村人達が手向けているのだろうか、いつ行ってみても、  
その山頂の祠には、餅や、四季の花々や、果物などが置か

れていて、——深く親しまれ、手厚く敬われていることが  
分かる。

そしてその二上ふたがみの山は、毎年春になるとあたり一面に咲  
く白い橘の花の芳わしい香りに包まれ、秋には黄金色の

無数の非時の香葉で美しく彩られるのである。(第三十六  
章へ母の許でへの項において既述)

\*

世のはかなきこと人々のたまふに

あるはなくなきは数そふ世の中に

あはれいつまでいはむとすらむ

とある。

「いはむとすらむ」は、「いきむとすらむ」の誤写である

う、という。「榮花物語」中の小大進とは別人の小大君が詠

んだ歌なのかも知れない

残りの六首を、宮内庁書陵部本『小大君集』の図書番号

で示しておこう。

「あしたづの雲るの中にまじりなば」

などいひてうせたる人あはれにおもほゆるころ

ひさかたの空にたなびく 浮雲の うけるわが身

は 露草の 露のいのも まだきえで おもふこ

とのみ もろこすげ…

恋も別れも うきことは つらきもしらぬ わが身

こそ 心にしみて 袖のうらの ひる時もなく あ

はれなれ…

いつか恋しき 雲の上の 人とあひ見て この世に

は 思ふことはなき 身とはなるべき

③ 西 おきのゐて身を焼くよりもわびしきは

みやこしまべの別れなりけり

### 井手寺

（一三頁参照）

されている。（小野小町追跡「片桐洋一、笠間書院、一〇八

以上の七首が、『小町集』と『小大君集』の両方に掲載

うたかた花をありと見ましや

⑦ 聖 滴の水木の 下近く流れずは

やりみづに、桜の花流るるを見て

天の 門川の 樋口あけたまへ

⑥ 西 ちはやぶる神もみまさばたち騒ぎ

むべき宣旨ありて

醍醐の御時に、日照りのしければ、雨乏ひの歌よ

なこそその関も我はすゑぬに

⑤ 西 みるめかるあまのゆききの湊路に

ありかでまたむとぶらひにこよ

④ 西 宵々の夢の魂あしりかく

であったから、—— 醍醐天皇が近江の采女（小町の孫娘）

しかしながら、二人共に光孝天皇の孫という高貴な出自

からない。

う中で、どのようにして愛をはぐんでゆかれたのかは分

醍醐天皇と、近江の采女とが、かまびすしい噂の飛び交

大宮御所の所領として皇室との縁が深かったところである。

という。(「小町伝説」明川忠夫、現代創造社、九八頁参照)

\* 「おばあさま。私の大切なおばあさま。もっともっと長生

きしていただきますとうございました」

小町の孫娘『小大真』(三十六歌仙のうちひとり小大君)

は、かけがえのない祖母であり師でもあった小町が、

『井手寺』で亡くなり、火葬された時に、……次の歌を詠

んだのではなからうか。

おきのゐて身を焼くよりもわびしきは

みやこしまべの別れなりけり

身を焼くよりもわびしい、都島辺の別れだつたに相違な

い。(宮内庁書陵部本「小大君集」一四二番歌)

また小町の孫娘小大君は、

「あしたつゆの雲るの中にまじりなば」

などいひてうせたる人(祖母の小町)を偲んで、宮内庁書

陵部本『小大君集』一四〇番歌を歌つたのかも知れない。

### 小野の里

それでは、小野小町が幼い日々を過ごしたであろうと思  
われる《古京の西北の隅》の方の様子を、もう一度見てみ

5,653P-3/3

\*横山の里を来哉せた、

章(母の許で)の項において既述。写真図版 819 (橘の花)参照

無数の非時の香葉で美しく彩られるのである。(第三十六

く白い橘の花の芳わしい香りに包まれ、秋には黄金色の

そしてその二上の山は、毎年春になるとあたり一面に咲

分かる。

れていて、——深く親しまれ、手厚く敬われていることが

その山頂の祠には、餅や、四季の花々や、果物などが置か

村人達が手向けているのだからか、いつ行ってみても、

ている。

そして横山の山頂には、小さな小さな祠が、ぼつんと立っ

思われる木彫りの像が安置されている。

さな鳥居があり、路傍の小堂には、小野良実卿と衣通姫と

七国神社の裏手から登って行く細い山道には、朽ちた小

である。

語り継ぎ、あがめ続けて、……いまにまで至っているの

しい姿をした二上の山「横山」についての何らかの伝承を

しかしながら村人達は、親から子へ・子から孫へと、優

(千早振る神代のことを知っている人は居ない。

千秋の里が流れた現在、小野の里あたりにさえも、

307

307 小野の里

カラー  
 ・右側の右半分  
 (上下段)に  
 掲載下さい。

5654 P

5,654 P

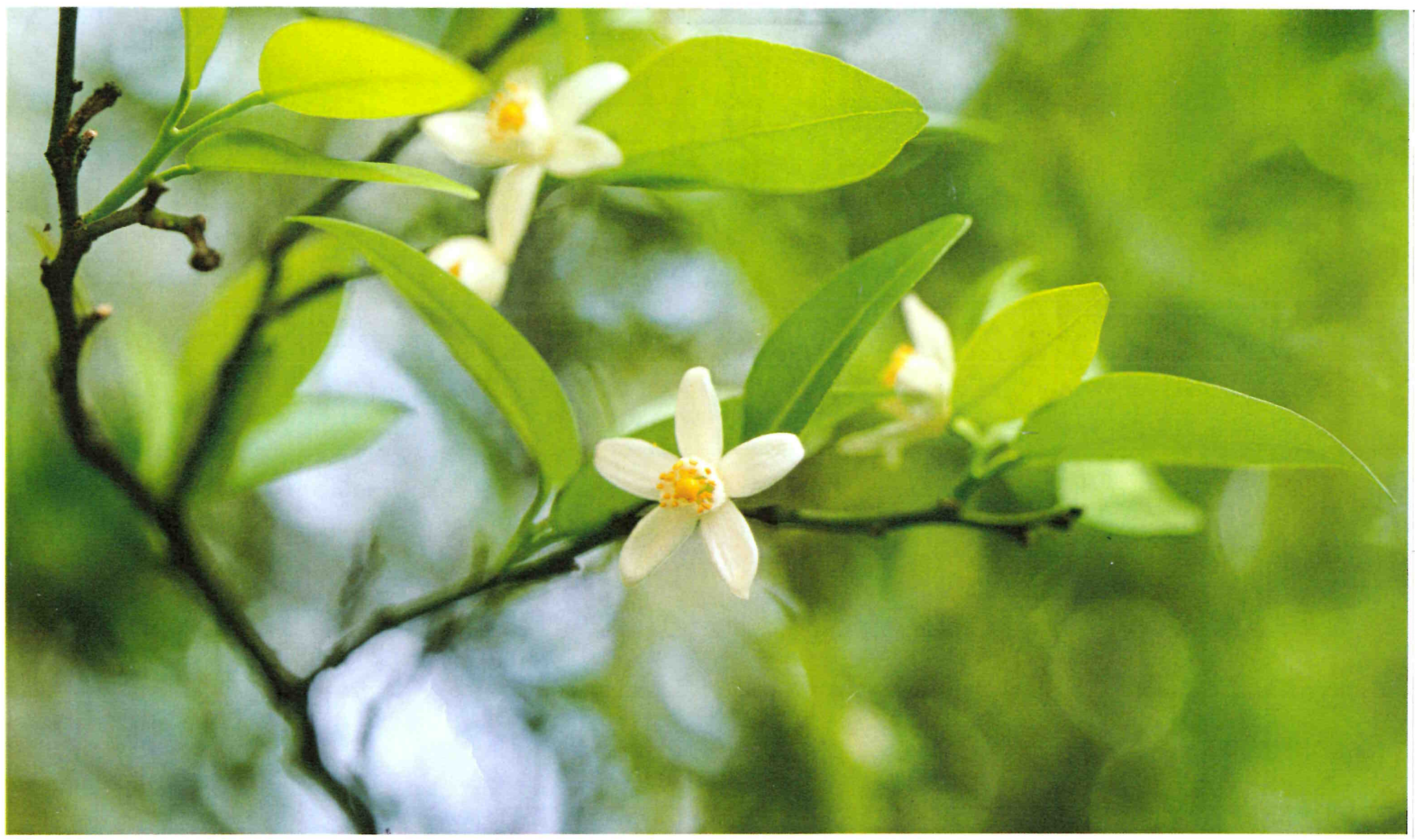
14219 2株  
 280 2株

中心いゆけ  
 1429 2株

写真4版 819  
 非時の香葉  
 (橘)の花

1324 2株

『大葉集入門』別冊太陽、日本のこころ180、平凡社、2011年4月25日発行、137頁参照



写真=入江泰吉記念奈良市写真美術館